

軍旅作家楊慈燈の短編小説からみる満洲国軍の実態

李 青

はじめに

本論考は、日中の「満洲国文学」研究の成果を基礎として、近年公開された軍旅作家楊慈燈⁽¹⁾ (1915-1995年)の作品およびその関連資料を糸口にして、植民地統治下という言葉環境下におかれた作家が表現した「満洲国」、「満洲国軍」の本質に検討と分析を加えようとするものである。楊慈燈の作品および関連資料に対して詳細な整理をおこない、楊が特定の環境下で表現しようとした思考の過程を透視し、戦争や植民地などの問題の分析をへて、楊の作品が指し示す精神世界を明らかにし、作品に秘められた寓意を解剖する。それを現代の植民地文学研究の新視点につなげたい。

「満洲国」の軍営を題材にした作品とえば、楊慈燈が筆頭にあげられる。「満洲国文学」の作品は数多いが、軍人を描写した作品は少ない。戦争という環境が時代のいぶきを持った軍人像を生み出した。楊慈燈はまさに現代の中国軍人を描写するさきぶれとなったのである。

「満洲国軍」の建軍は、⁽²⁾「満洲国」建国後に張作霖の軍閥部隊の残存を吸

-
- (1) 楊慈燈 (1915-1995) は山東省生まれ。家計が苦しかったので、中学を中退してから、寺で武術を習いながら、写経していた。14、15歳の頃大連に移住した。旅館で働いた際に、その勤勉ぶりと流ちょうな日本語は日本人客から好評を得ていた。常連客から推薦され、「満洲国軍校」(中央陸軍訓練所と推察される。1932年10月奉天にて成立。)約2年間の訓練を経て、10代未満の若さで満洲国軍に入隊し、下級軍官に任官された。満洲国軍に10年間服役し、退役時に大尉に上りつめた。1932年に入隊し、1943年に退役した。楊慈燈の文筆活動はこの10年間がもっとも活発である。40年代後半は文筆活動に専念した。45年以後は共産党に協力していたが、共産党政権下で迫害を受け、文筆活動は行われず、80年代によりやく名誉回復された。1995年80歳の生涯を閉じた。
- (2) 張作霖 (1875-1928) 軍閥で政治家。東北地方(旧満洲)の統治者である。遼東半島海城県生まれ。青年期に馬賊に身を投じた。清朝末期、日露戦争、軍閥の争いを経て、東北地域での地位を確立した。東北地方に「満洲国」建国の計画が進められている中、張作霖の存在を望まなかった閥東軍に1931年9月18日に暗殺された。

収編成してできた。日本の正規軍による参画と訓練で、「満洲国軍」は正規軍となっていった。この点については、各種類の史料と楊慈燈の作品中からその発展過程を垣間見ることができる。

筆者は楊慈燈の代表作の一つである『老総短篇集』^[3]を手がかりにして、この短編から「満洲国軍」の描写と「満洲国」という言語環境下での文学的特徴を考察する。

一 「満洲国」時代における楊慈燈の作品

楊慈燈の文学創作の黄金時代は、まさに「満洲国」時期と重なる1930年代から40年代である。楊はほぼすべての創作の精力を軍旅生活の描写につき込み、数多くの生き生きとした人物像を形作り出した。作品中には、悲惨な戦争の場面があり、威風堂々たる行軍の隊伍があり、心が張り裂けんばかりの悲劇の離合があり、戦争が民衆にあたえた数々の災難などの描写がある。これらの場面は、歴史に埋没している「満洲国軍」の実態を考察する絶好の材料を提供してくれている。文学作品の魅力とは、読者を作品に引き込む力と審美意識である。楊慈燈が描き出した東北は、森林が限りなく広大で、びゅうびゅうなり声をあげる北風は羽毛のようなぼたん雪を引き連れてくるし、荒漠としていて人跡がない原生林には野蛮と荒涼とが満ちあふれていた。レンズを近づけてよく見ると、樹海の雪原を行軍する兵士には異常なほどの強靱さと生命力があったことがわかる。楊の文体は精練さと華麗さに欠けるところもあるが、それは軍旅生活が楊の粗略さをもたらしたからなのであって、それがかえって楊の文章中に充分なほどの度量の広さをもたらすことになった。

楊慈燈の創作の題材は広範にわたり、形式もまた多様である。そのなかで大きな部分は、軍旅生活を描写した小説であり、楊自身が経験したことを書いた可能性がもっとも大きい。当時の知識人の思考経路、生存状態、および

[3] 『老総短篇集』は初出が康德九年（1942年）11月、藝文書房より出版された。本発表は2015年吉林省図書館が整理し、複印復刊した「偽満時期文學作品叢書之四」の『老総短篇集』をテキストとする。

参考文献として『楊慈燈文集』（上巻・中巻・下巻 遼寧人民出版社・2015年）と劉曉麗主編『偽満時期文學資料整理與研究』作品巻「慈燈作品集」（北方文藝出版社・2017年）を使用する。

「満洲国軍」の実態を提供した貴重な文献である。

楊が描写した軍人像のほとんどが整っているわけではなくふぞろいである。正義感に満ちあふれた青年将校、勇猛果敢で民衆に同情的な兵士、賄賂を横行させて私腹を肥やし公衆の利益を損失させる腐敗した司令官、勢力をかさにきて民衆を圧迫し悪事をやり尽くすごろつきども、花柳の巷に遊び、腐敗墮落した部隊の風紀、これらを描いている。楊慈燈の描写のなかに、「満洲国軍」絵巻を見ることができる。

楊慈燈の作品は、時局やはっきりとした時代背景への言及がとても少ない。そして日本人が主人公として登場する作品はそれよりさらに少ない。作品の叙述はある事についてだけの得失を論じるという作風を保ち、時局に立ち入るような個人的見解と議論は少ない。自分がよく知っている小人物、自分が目をかける価値がある兵士、限らない同情を寄せる困窮した民衆を描写している。楊の作品は「満洲国」時代に大衆の間で流行したものの、時宜に適さないなどの理由で、発禁処分を受けた形跡はない。楊もどの文藝団体にも参加せず、官や民の集まりにも顔を出すことなく、各文学賞も受賞することはなかった。繁雑な社会では、こうした強烈な自己保身の意識こそが、楊慈燈の文学を黙々と静かに延命させたのである。

この短編集は、軍旅生活のほか、その視線を常に身邊のごまざまな小人物たちに焦点を合わせ描写している。また、作家志望の青年インテリの「雑誌を包んでいた紙」（『包雑貨の紙』）、子供の出世を願うものの教育方法を知らない資産家の「禁令」（『禁令』）、市井の小市民夫妻の生活の「ベルベット」（『絲絨料』）、「妻の命令」（『妻的命令』）などがそうである。これらの小説はみな短編であるが、内容の展開が面白く、読むと思わず笑ってしまう。楊はこれらの小説の創作を通じて、読者のために生き生きとした「満洲国」時代の衆生図を描き出したのである。

二 『老總短篇集』にみられる楊慈燈の軍旅小説

『老總短篇集』は1930年代後半から40年代初期まで、ちょうど「満洲国」統治の「全盛期」とあると同時に、楊が「満洲国軍」で将校として勤務していた時代、を描いている。この特殊な軍旅生活があったからこそ、作品の表現が真実みを帯び生き生きとしたのである。楊という作家の精神的な高さ、

生活状態と生活への理解度の深さをはっきりと現わしている。目録から見るとこの短編集でもっとも早い創作は一九三六年であり、それ以後の数年間の一九三九年までに創作されている。時間の経過とともに作品数はますます多くなり、内容にも深みが増している。では、年代が記されていない十二篇はいつ創作されたのだろうか。楊の序文から推察すると、どうもそれらの十二篇も三十年代から四十年代初期に創作したにちがいないことがわかる。

戦争を描写するには多くの非理性的な状態の描写が必要になり、残酷きわまりない現実から人間性を発掘し、靈魂の価値に注目せねばならない。

小説は砲弾、弾丸が雨霰と降り注ぐ戦場で、将兵が血を浴びながら奮戦する場面の描写だけでなく、楊の軍旅小説にはさらに多くの非常に恐怖をあたえる血で血を洗う場面を省略し、人間の心の動きおよび戦争が残した傷跡の描写を重視した。楊の小説では、その多くが交戦する敵を明確に描写していない。読者も敵がどの集団なのか推察しがたい。ただ一部では土匪、馬賊と言及している場合もある。『战友』はある戦場で肩を並べて戦っていた战友養訓の物語である。楊は直接戦争の悲惨さ、激烈さを記さずに战友が犠牲に

(4) 『老總短篇集』康德9年(1942年)出版。藝文書房“駱駝文學叢書”第7冊。

出版時に楊慈燈はペンネーム“慈燈”を使用している。『老總短篇集』合計短篇小説44篇。うち12篇を除き、すべての小説の最後に著作時間と場所が明記した。

1936年 合計七篇

1936・5・27 登了一篇稿的人 9・15 我們的旅伴 11・7 战友 11・20 梨樹溝 12・6 路上 12・6 禁令 12・28 閒聊

1937年 合計四篇

1937・9・24 發餉 11・5 一隻紙煙 12・6 夜學校 12・6 血的色水

1938年 合計八篇

1938・9・5 壞小子 9・10 張安的失望 9・20 絲絨料 11・20 前哨 12・12 行軍 12・20 包雜貨的紙 12・24 父親來的時候 12・30 回憶

1939年 合計八篇

1939・7・6 山中 4・28 欺騙 8・6 脾氣大的教官 12・3 放大尺 夏 坍塌的房子 8・26 赴任 8・26 謝罪 5・5 燒雞

1940年 合計二篇

1940・夏 破壞 夏 拼命

1941年 合計一篇

1941・冬 同性

1942年 合計三篇

1942・5・28 野營與野餐 夏 往事 夏 激烈的戰鬥

創作時間及び場所不詳 十二篇

禁閉 雪夜 新戰術 搶親 謝罪 騎駒 吉排長 灰色的群 妻的命令 老李 狐疑 在英國人的地下室

なったことを描写している。これは人物像を浮き彫りにすることを重視し、大自然の風雨が変化する描写で、戦友を失った自己の心情に仮託しているのである。楊は親友賽訓を「吸える煙草さえあれば、それで満足する。身長はわたしより少し高く、おしゃべりが好きで、心に思ったことをすぐに口に出して言う。温厚な性格で、誠実である。眼鏡のテンプルが折れた眼鏡をかけている」と紹介している。レンズが同僚に尻の下に敷かれて割れてしまったのだが、最後には腹を立てることもやめた。兵士はかれを小隊長と呼んでいるから、小隊のなかでは地位が低かったのだが、眼鏡をかけているので文字が読めて意味がわかるはずだ。例の戦闘の直前も、わたしと賽訓がそれぞれ手分けをして任務を執行していたが、「かれとわたしは相互に見つめあい、ある盟約を誓い合った。恋人同士が永久に分かれようとするようだった」とある。その後、「われわれは握手して、手をとりあって草門を出て、暗闇の入り口で分かれた」のだった。小説には戦闘開始以前の大自然に対する擬人化した描写があり、読者に災難が降りかかろうとする緊迫感を感じさせ、さらなる悲劇の色彩を加えている。「月のない深い黒い夜間、風が夜半まで吹き、銃声も驚かす。怒った。もう充分なほど怒った。さらに強く風が吹き始めた。暗闇のなかでしおれてしまった木の枝が、悲惨な叫び声をあげはじめ、ミュンミュンとうなる。小道の両脇にある粗末な家の窓の貼り紙もガーガーと叫びはじめる」と記している。

戦闘が終わった後、戦友の賽訓が戦死したという知らせは、わたしを悲しみの底に引き込んだ。わたしは悲しみのなかで戦友を回想すると、彷彿として戦友がわたしの身近にいるのを感じた。「わたしは恍惚として賽訓の姿を見た。賽訓は無言のまま入って来たが、顔には泥と血がこびりつき、軍服は破れ、胸にも血があった。賽は破れた外套肩にかけていたが、外套の袖はすでになくなっていた。かれの髪の毛は乱れ、髪も泥と血にまみれていた。わたしはますますはっきりと見えてきた。かれの影がわたしの眼前に立ち、ほんやりと、朦朧としたまま立っていた。両足は震えていた。あっ。かれの足も爆裂で吹き飛んだんだ。かれの右腕は。どうなった。残されたのは一本の腕だけで、かれの顔色は青白く、目は半分閉じられ、顔には髪の毛がへばりつき、紫色の唇は堅く結ばれていた」とある。現実に戻ったとき、賽訓に安心してもらうように努めた。「とっくに声なき別れを告げ、賽訓は静寂

の草原に到り、あの美しい国に行ったのだ」とわたしはわたしの心に言い聞かせた。小説は人物の精細な描写を通じて、読者を感動させ、文字の震動を感じさせると同時に人物の美しさを感じさせた。小説の最後はこのように結ばれている。そこには、「二日目の夜、われわれはまた匪賊と戦闘を開始し、こてんぱんに打ち負かした」と書かれている。

王小隊長と同志たちは歩哨に立ち当然しなければならない辛い役目を果たした。無味乾燥な夜、伸ばした五本の指も見えなかった。だが、作者は大自然という心地よく聞こえる風が運んでくる「管弦楽隊」の音に、歩哨に立つのも心地よい愉快的な部隊生活だと感じさせ、戦闘前の緊張感を緩ませたのである。またこの「管弦楽隊」が出現するとき、戦闘は開始されており、緊張した雰囲気はただよっていた。「しおれた木の枝は真夜中に揺れ動き、管弦楽隊はもう無力で、風は四方から吹きすさんでいた。満点の星々で、王小隊長は絶えず目をよせているようだった」。作者は「管弦楽隊」が演奏する音符を通じて、読者に物語のその場面と人物の心理変化を感じさせたのである。

楊の作品から、われわれはかれの戦友に対する無限の愛情が充満していると感じられるし、戦士のほんのわずかな描写に感動を覚えるのだった。『前哨』は物語の開始早々、偵察兵に対して特に詳しく説明している。それはかれが長時間の行軍で、すり破れたからであり、行軍は非常に困難だったからである。だが、たとえ行軍行動はとても速くても、楊はいつも齒をくいしばってついて行った。楊はこのように歩哨について描写している。「陳興の足は、とても痛んでいた。陳興は銃を抱えて木の下に立ち、一刻一刻と寒さを感じていた。陳はますます寒くなったが、吹く風はまるでうれしそうに、からかうようにかれに迫ってきた。かれは声を立てずに上半身を揺らし、血液を身体全体にめぐらせようとした。するといくらか温かくなった。どうにかこうにか無理矢理に一日歩いたが、また足がすり破れた。かれ身体は機械ではなかったから、疲労と苦痛に包囲されていた。またしても冷たい風がかれをからかい、かれは冷たい風をととても煩わしく感じたが、銃をほったらかしにして眠ったのだった。かれの性格は我慢強く、他人から賞賛されるほどだったが、嘲笑されるのを嫌った。だから、かれは疲労に耐え、痛む足を支えて、辛抱強く申せ明との交替を待ったのである」と。陳興は作品のなかで最後にこのように登場する。「足がだめになって、走れなくなった。かれはよ

ろよろとよろめきながら齒をくいしばって走ったのだが、突如つまずいて倒れた。急いで起き上がろうとしたものの、前方の兵士はもう遠くに走り去っていた。叫び声をあげようとしたが、敵に見つかるのを恐れて、ひそかに駆け回ったが、数十メートルで石ころに足をすくわれてひっくり返った。かれはまた起き上がろうとしたが、このとき数発の銃声が耳をつんざいた」と。戦友は最後に隊伍の後に残り残された陳興を待つことはなかった。刀や銃で戈を交える戦場の場面ではないものの、陳興という人物の個性的な描写に対して、激戦で深手を負った陳興がいったいどんな結末を迎えるのか想像に難くない。戦争とはこのように残酷なものなのだ。これは楊が愛情を注いで描き出した毅然さであり、頑強な兵士の形象なのである。戦火が飛び交う時代、時々刻々と無数の戦士が永遠に倒れ込んでも、誰も戦士の名前すら知らないのだ。楊はその筆致を絶対に社会で重視されないものに合わせ、ときには誰のために世間に名を売ろうとするのかも知らない軍人、小人物の命が楊の描写で高尚で尊いものに変化したのである。楊のこれらの小人物に対する描写こそ、作品に燦爛と光り輝く生命の魅力をあたえているのである。

楊は自然の風景を好んで用い、人物の心理の変遷、感情の起伏を表現する。『雪花』が良い例である。物語は兵營の近くで起こる。歩哨に立つ兵士が民家の男の子から、家に強盗が這い入ったとの話を聞いた。少尉はすぐに部下の兵士を率いて匪賊を捕捉し、悲憤慷慨して金を出して民を救ったのである。物語の全体は「極寒の冬に舞い散る雪」という筋で貫かれている。

楊はこの短編集で、多数の軍隊の暗黒で墮落した側面を暴露した小説を書いている。かれ自身が部隊生活で体験した出来事だったので、これらの人物描写をぴったりと合わせられたのである。

『赴任』は第一人称の「わたし」が主人公である。士官学校を卒業したばかりの青年将校が、総司令官所在の兵營に赴任させられる。この場面設定から、この青年将校には楊自身を作品に投影していることが容易に想像できる。「わたし」は赴任した部隊で、さまざまな醜い人物に出会う。到るところで派閥を作るような、腹に一物を持つ輩である。部隊の上下すべてが大隊長の一派で、「わたし」といえば、みなに「上層部が派遣してきた、強情者」と思われていたから、なんと上官もわたしを怖がっていた。軍餉に厳しい中隊長、煙草吸いの大隊付き副官、女好きの軍司令官、上から下まで軍紀は乱

れていた。

『発餉』はさらに深く反省させられる作品である。貪欲きわまりない趙副官とかれに追従してこびを売る一派が部隊で横暴な振る舞いをしてでたために悪の限りを働いて部隊の財を放蕩する。

『謝罪』は軍内のどたばた劇を風刺している。部隊がある村に宿営したことで、静寂な村がにわかに安らかでなくなり、軍人は村人を、真っ黒な毒気を出すように大声でなじりせめた。小説のこれらの登場人物たちから、軍人たちは民衆に殺人鬼として接したことがはっきりと感じとれる。民衆は強権な郷紳に対しても膝を折って卑屈になったのである。権勢がある者は権勢を借りて公道をねじまげるが、民衆は黙って忍耐して腹の虫を押さえるしかないのだった。

『一隻紙煙』は中隊長が村で負傷兵を治療するときの経過の回想を通じて、戦争で世のなかが乱れた時代に民衆が万策尽きた中隊に強奪を強行する物語である。

『閒聊』は郭上尉と張少校の回想を通じて、かれらがもともと対立した陣営にいたのだが、今は同じ陣営にすることがわかる。

『張安の失望』は一人の善良な中隊長の使用人だった軍人張安について描写している。百元を惜しまず値上がりした小麦粉を行きつけの店主に買ってあげ、目的は店主の娘を妻として娶る。しかし、娘はすでに婚約したと告げられた。部隊は翌日に出発することになった。散在したあげくに、結婚もできなかった軍人張安を淡々と描いている。

『我們的旅伴』は誰が見ても哀れむ小さな男の運命を描いている。彼はなぜか始終軍隊の移動に張り付いた。この小さな男の子は貧しい親戚訪問を装ったが、正体はスパイである。厳しい拷問に耐えきれず、姉も敵のスパイであることを供述した。結末で、姉は生き埋めにされた。涙を誘う一編である。

『脾氣大的教官』は厳格な気性の荒い教官を描いている。日常訓練を通じて、教官の厳格、暴虐、無情及び几帳面さをリアルに表現した。これら人情に通じないような訓練の場面は楊慈燈自身の士官学校生活の再現と考えられる。

軍旅生活を描写する作品には、行軍中の辛酸のほかに、百姓との交流の場面もあった。戦禍の絶えない年代に若い大尉が百姓に同情し、気前よく民衆

を救済するストーリーが綴られている。こうした描写は青年期の楊慈燈が持っていた下層民衆への同情の心情からくるものであろう。

他にも任務を完遂するために行軍する軍隊のありのままの姿を描写する短編も多数ある。

楊のこの時期の小説を総合的に観察すると、以下のいくつかの特徴がある。

I 軍旅生活の実際、東北軍人像の剛健さと重厚さ

楊慈燈は十数歳で軍官学校に入学し専門的な訓練を受け、卒業後は下級将校に任官した。軍旅生活中はつらく苦しい訓練、戦闘を長年にわたり経験した。自分自身の軍旅生活と軍人の身分で、軍旅生活を描写した作家は「満洲国」においては、楊ただ一人である。長い軍旅生活で楊は下級将校から、退役時には上尉まで上り詰めた。作品中にも多く出てくる。『雪夜』の上尉は、赤貧洗うがごとしあばら屋で追いはぎになけなしの6銭を奪われてしまい、泣き声にもならず泣く婦人に対して、上尉は躊躇なく自分がさっき受け取ったばかりの俸給を差し出した。『赴任』も、正直者の若い、初陣の上尉が主人公で、軍中のさまざま腐敗を暴露する。そのほかの作品中でも、青年将校と兵士との団結と友愛の叙述を見ることができる。

楊は明らかに自分自身を描写し、自分と作品とを融和している。作品では数多くの第一人称の「私」が使われているが、小説を書くとき、生活に接近し、随所に楊本人の影を探し出すことができる。長期間の軍旅生活の実践は、作品を多彩豊富なものにした。真善美悪は作品で具体的な表現になっている。打富濟貧、互助友愛、堅毅剛強、飲食、女、賭博、貪官汚吏、充滿する下品さなどを織り交ぜた「満洲国軍」の運命交響曲は、重厚な色彩で、中国の東北農民出身の軍人が、ある特定時期の民衆の生存状態の輪郭を描き出したものになっている。

楊慈燈は幼少時家が貧しく、成長の過程で身分の高い人物からの資金援助を受けて学校で勉強し、軍旅生活を送ることができたのだ。これが時世を憂え、他人に情け深い性格を形成し、文学作品の表現形式に、決定的な影響をおよぼした。困窮したあげくに一家離散する生活、貧困生活の中で必死になってあがく大衆を目撃して、軍隊中の奇聞怪談、旧軍隊が転変する過程での数々の病的な弊害、これらを事実と真実に基づいて記録した貴重な作品である。作者の文学の好みのほか、作者の時代に対する認知と深い悟りを感じ

じるのである。

東北地区の軍隊の構成は複雑であり、軍閥割拠の時代的な影響を受けた。さらに東方地方には土匪が横行しており、度重なる改編で善人と悪人とが入り混じっており、土匪出身の兵士も混合していた。だが、兵士の組成がいかにも良悪混合していて均一でないとしても、兵士個々人はみな下層社会からきた、困窮層の出身者だった。これら下層兵士の多くは軍閥時代の悪習を持っており、軍紀に違反し、民衆に危害を加えた。これに反して、兵士は部隊で常時、上官からの殴打、痛罵、俸給のピンハネを受けていた。今日酒を飲んでも、明日には戦死するかもしれない戦場の残酷な現実には、多数の兵士をやぶれかぶれにさせ、自暴自棄にさせた。逃亡、民衆圧迫、飲食、女、賭博などの描写は、小説中のきわだった表現になっている。

だが、楊は矛盾だらけの軍隊生活のなかで、ずっとたえず人間性、真善美の一面を掘り起こしていった。「満洲国軍」部隊の中でこれらの戦士たちは、多少なりとも戦争の洗礼と啓蒙を受けた。『赴任』には、こうした血気盛んな兵士が登場する。営長（大隊長）の護衛兵はある娘を妻として娶ることをえさにして誘惑し、もてあそんだ後に捨て去った。会わず顔をなくした娘は首を吊って自害するしかなかった。このニュースが伝わると、激怒した兵士たちが営長の護衛兵を銃殺し、集団逃亡してしまった。みな愛憎がはっきりしている血気盛んな兵隊なのである。楊自身は日本人が運営する士官学校で二年間にわたって厳格な訓練を受け、近代的な軍事技術を習得していた。中国史上、国民党または共産党の高級幹部には日本の陸軍士官学校を卒業した優秀な人材が多い。かれらは近代的な軍事知識をマスターし、それを中国の軍隊に適応させた。中国の軍隊の近代化の実現に優良な作用をもたらした。とすれば、楊もこうした青年将校だったはずである。楊の小説にたびたび出現する上尉のイメージはたいそう紳士的であり、文化的で、文化的に任務をこなす、訓練中もきちんとしていて、情け深い。『前哨』では、ある程度の素養のある将兵訓練する様子が見て取れる。

大隊副官の姜上尉は命令の順番に、一行ごとにその最初の文字に印をつけ、また日付、時間と命令を下した者の所在地を記入した。それから、大隊長に校閲してもらった。上尉は静かにうつむき加減のまま部屋の片

隅で大隊長の承認を待っていた。

大隊長は校閲後、頷きながら、ポケットから印鑑を取り出して押した。大隊長は一呼吸おいて、「各中隊を招集し、命令を口述筆記させよ」。

「了解致しました」。 (中国語原文はテキスト 325頁。筆者訳)

(中略)

命令を拝命するときの、満洲国軍を描写する一場面がある。

李班長は上半身を揺らしながら列の最後尾から最前列に出てきた。彼はかかとを一線にそろえ、足の先を左右に60度に開いた。頭をまっすぐにし、両手で銃を力強く上に垂直に上げ、左手で銃身を叩いてパンと音をたてた。小隊長を見てから、銃を右足の先に下ろし、小隊長の命令に耳を傾けた。

「六人を連れて前方の雑木林で敵の動向を監視せよ」

李班長は上記の命令を復唱してから、右足を後部に引き、両足のかかとで身体を右に180度を旋回し、列の中から素早く六人を選抜し、鮒の群れのように東の方へ走っていった。

(中国語原文はテキスト 326頁。筆者訳)

以上の一つ一つの複雑な軍令は、印鑑を使用し兵士が命令を受けるときには、標準的な模範的な動作をしており、「満洲国軍」と「楊慈燈」の姿が邂逅する感覚がある。楊が士官学校で学んだ軍事技術を部隊に持ち込んだのは明らかである。楊が描いた部隊は決して烏合の衆、へなちょこの軍勢ではない。楊は若い「大尉」と同じく、士官学校で学んだ知識を中国人部隊で運用しようと努めた。このような実際と符合している願望は、楊の小説中で具体的に表現されている。

Ⅲ 内容的な暗さと政治の回避

『老總短篇集』の特徴は、作者が意図的に時空概念を無視して、多くの場面を「軍閥時代の物語」と設定している点である。このような時間設定は、読者に時間上の錯覚を覚えさせ、ああ張作霖時代の物語かと思わせる。作品中の対話にも兵士が奉系軍閥の悪口を言う場面がある。両軍対峙する戦闘中にも、しばしば敵の特定を避けているし、ときどき出てきても「胡匪」「胡子」など、簡単にすませてしまい、そのまま素通りしてしまう。

楊は文学青年で早くも1931年『泰東日報』に作品を発表したが、その後新作は後を絶たなかった。「満洲国」では各種の法律の束縛があり、文藝作品は厳しい審査を受けるのは当然だった。当時発表した文章もそのほとんどが以前から審査待ちだったと想像可能である。時局に符合する言論が作家の作品の隅っこに出てくることは考えられた。

楊の作品にも、時局に迎合する字句が見つかる。『赴任』（中国語原文はテキスト 224頁。筆者訳）の結末では、「事情は過ぎ去った。何年も、現在わたしはまだあの醜悪な歴史を忘れられない。軍閥時代の軍隊はこの世で存在していくことができるのだと思う。大東亜共栄圏の建設には日満両国の精鋭軍が担当しなければならない。私はこの陣営で十余年生活している。これからも生活し続ける」とある。

『吉排長』（中国語原文はテキスト 242頁。筆者訳）の末尾にも同様の時局に関する文言が見られる。小説は吉排長の軍閥時代の回想の聞き取りという形式である。「かれのいくつかの断片的な話を聞き終えると、わたしは非常に悲しい気分になった。旧軍閥時代のあした人々の生活は暗黒すぎるし、驚かされる。全東亜各民族の幸福のために、急いで、共栄圏の事業を建設しなければならない」。

「灰色的群」（中国語原文はテキスト 270頁。筆者訳）の結語は、「前旧政権の軍隊とわれわれの現在の満洲国軍を比べると、まったく異なる二つの世界ではないか」となっている。

以上、3作品の末尾の部分は、2015年に復刊された『楊慈燈文集』（上中下巻）では削除されしまっている。

さらに、劉曉麗主編『偽満時期文學資料整理與研究』の作品巻、「慈燈作品集」（北方文藝出版社・2017年）には『赴任』が選ばれているが、上記の「不都合」な箇所は削除されてしまっている。ところが、該書の「出版説明」⁽⁵⁾には「最大限に偽満洲時期の文体と風貌を保持し、作家本人の作風と創作習慣を保持するために、本シリーズは選んだ作品における言葉の形式、語彙及び用法をすべて現状のママを保ち、現行の規範によって書き換えていな

(5) 劉曉麗編『偽満時期文學資料整理與研究』作品巻「慈燈作品集」北方文藝出版社 2017年）456頁。

い」とある。残念ながら、上記で引用した部分は「何らかの理由」で「不都合」だと判断された結果、削除されてしまったので、読者の目には触れることがない。考えてみると、社会主義中国の文藝政策と価値観に符合しない「附逆」な言論など掲載できるはずがない。「抗日作家」という完全で美しい像が誤りを犯したことになるからである。作家が作品を発表するとき、時局に符合する言論を附加するように求められる。過去の歴史を改めて念入りに検証するとき、「満洲国」では挙国一致で上も下も「大東亜共栄圏建設」を提唱する風潮が高揚しており、日本の士官学校で教育を受けて日本統治下で成長した青年将校がどうやったら高潮する抗日の自覚と明確な反抗精神を持てるというのだろうか。

楊は自己の文学生活の中で、大部分の時間は軍旅生活だったから、どんな文芸団体やそれに連なるような団体に参加しなかったし、どの文芸大賞も受賞することはなかった。最初から最後まで、一文芸愛好者の身分で、黙々と自己の楽土を耕し続けたのである。

楊は小説の創作を得意にしていたが、短編小説が精悍で、弁舌がさわやかである。行間には美しく華麗な語句は少ないので、中下層の文化水準がさほど高くない文学愛好家の読者には絶好の読み物である。しかしながら、文体として口語式の日記帳形式を採用しており、叙述は起伏がなく平板で味がなく、この起伏と文学的加工との欠如は、作品の精彩を欠くことになっている。

Ⅳ 植民地言語環境下における楊慈燈小説の芸術表現と審美追求

楊は日本統治下という特殊な時代に故郷で成長した。故郷を離れて生活し、軍人になるために士官学校に入学する特殊な経歴、社会のさまざまな矛盾、特殊性、複雑性は必然的に作家楊の審美趣向、言語の運用と小説の構想および表現形式に影響をおよぼした。

まず、東北の特殊な自然環境を注視する必要がある。清朝による長期間の封禁政策により、東北地区には相対的に閉鎖的な性格が形成された。最果てのない樹海雪原、広大で深い原生林、人煙まれな荒野、これらはほぼ遅れた、粗野な、野蛮な、愚昧な自然風景をもたらした。その多くは楊の作品に天然の悲劇的色彩と神秘的な雰囲気をもたせたのだった。

軍隊について言えば、「満洲国」建国後、日本が参与して組織整備、訓練

され、近代軍として建軍した。歴史的な原因と自然環境が東北地区に土匪、山賊と軍閥が相争う地盤を形成した。「満洲国」建国後、張作霖の旧部隊とそのほかの軍閥の残存部隊は、依然として大きな影響力を持っていた。民間には「武を重視し文を軽んじる」尚武の精神が濃厚で、剽悍、強毅、豪壯、横暴、必死に努力すること、下品さが各所に満ちていた。こうした地域文化が表現する特色は、疑いなく楊の創作の巨大な源泉だったろう。地域文化からくみ取り、自己の文学を栄養豊かにして、作家の審美意識の構想に対して知らず知らずのうちに感化する影響を構成した。

楊の小説から、地域文化の再現こそが明晰な真実であることが見いだせる。審美意識の上で言えることは、芸術的な珍奇な効果を重視するよりは、東北地区の真実の生活に接近して、真実を求めるほうがよい。人物の輪郭の描写、物語の筋書きの展開は、細やかな心理状態の頁数を費やした描写に重点を置いたものではなく、さらにもっと大なたを振るう処置をして、強力な表現をし、端正厳肅さと重厚な雰囲気ひきたたせることを重視したのである。これも楊が読者に与える特殊な芸術的感染力である。楊の軍旅小説中に戦友への愛、民衆への情け、生命に対する尊重にあふれている。空が広く寥寂とした東北の大地の蒼氓とした背景下で、楊の筆致は、読者を特殊で審美的な視野に引き入れるのである。氷と雪の世界に舞う雪、軍馬が嘶き戦場を疾駆する様子、絶壁を駆け上るような急行軍、暴風が荒れ狂い、吹雪が吹き荒れる。これらは大自然の真実の姿そのままであるが、作家の審美意識の特殊な表現でもあるのである。

おわりに

植民地傀儡国家「満洲国」の建国からすでに88年前がすぎさった。植民地研究の分野では、日中で歴史のそれぞれの段階で異なる価値観による評価と研究成果が存在する。

まず、中国大陸では、「満洲国軍」における生活をモデルとする作品は、長い間、排斥され冷遇されてきた。学术界はしばしば政治的な角度から、明確に抗日意欲があるか否かで評価してきたが、純文学的な角度から見ても「満洲国」時代の文学は芸術的価値が低いと思われている。発表者は、評価の低い原因の多くの要素は偏向的な政治的な視点にあると考えている。

新中国成立後、イデオロギーを極度に政治化し文学批評とその価値の定位置は社会体制からの影響によるようになり、政治優先でその動向に左右され、文学自身は独立した意識に欠けるようになった。2015年に再版された『楊慈燈文集』でも、政治的な標準に達しない語句は削除されている。「満洲国軍」を描写した作品に対する評価基準は、今日でもなおこうした政治的なしきたりから免れていないと感じる。

中国近代は内憂外患で、抗日戦争中、各党派はみな「抗日愛国」「国家」「民族」などのスローガンを唱えて国民を至誠団結、共同して敵に対峙した。侵略と抵抗の二元対立の架橋は、新中国成立後もずっと使われ、今日でもなお植民地地区の文学を判断する標準になっている。抗日思想を植民地地区の主流の文学とするのは、いまだに研究の真実性が欠けることが多々ある。「満洲国」は独立した傀儡政権であり、植民地統治に分類される。行政法律の各項目が国家の各部門に浸透している状況下では、植民地文化は主要な地位を占めていた。だがこうした特殊な環境下で生まれた文学もまたこの時代の無視できない存在となっている。今日新たに楊の植民地「満洲国」における創作を評価することは、先験的な偏見を捨て去って史料を読解することの重要性を教えてくれる。そして楊の文学は、植民地という言語環境下におかれた真実の描写を与えてくれる。楊の文学は魯迅、茅盾、巴金、老舎の大家作家とは並べられないのだが、だが、楊の文学の存在は、植民地時期の特殊な語彙表現で構成され、植民地時代の文学の氷山の一角を支えた。楊慈燈が開祖の軍旅文学が重視されねばならないのは、理論上当然ではあるが、中国現代史上において重要な地位を占めているのである。

今日、さらに多くの関心を持って詳細に研究に当たる史料がある。植民地の複雑な政治環境と雑駁混雑した文化現象は、歴史的環境と史料に依拠して公正に評価するように努める必要がある。(完)

参考文献

中国語：

- 1 王勁松〈植民地文學的阐释模式與文化政治—跨文化視野下的偽滿洲文學研究〉、《中國現代文學新史料的發掘與研究國際學術研討會論文集》(北京：中國現代文化館、2009年)。
- 2 張毓茂 閻志宏〈論東北淪陷時期小説〉、《東北淪陷時期文學 國際學術研討

會論文集》(沈陽:沈陽出版社, 1992年)。

- 3 傅大中〈“九・一八”事變後關東軍招降納叛〉第一編,《偽滿洲國軍簡史》(長春:吉林文史出版社, 1999年)。
- 4 夏正社〈慈燈小傳〉,《楊慈燈文集》下卷(沈陽:遼寧人民出版社, 2015年7月)。
- 5 陳實〈楊慈燈:偽滿洲國的現實之晝與童話之夜〉, 微信(we chat)公眾號:偽滿洲國研究中心, 2016年2月16日發表。
- 6 黃萬華〈戰時軍營文學:中國現代軍人形象的啟端〉,《中國海洋大學學報社會科學版》第5期(2005年5月)。

日本語:

- 1 小林知治《滿洲國軍を語る》(國防功究會, 昭和15年〈1940年〉)。
- 2 尾崎秀樹《近代文學の傷痕 舊殖民地文學論》(岩波書店, 1991年)。
- 3 山本有造《「滿洲國」の研究》(京都大學人文科學研究所, 1993年初版。東京:綠蔭書房, 1995年改訂版)。
- 4 李青〈解題ある「滿洲國」軍官の日記『轍印深深』〉,《文藝論叢》第83號(2014年10月)。
- 5 李青〈『轍印深深』—ある滿洲國軍官の日記に現れた戀文について〉,《文藝論叢》第83號(2015年10月)。

新聞:

《大同報》(1933年~1942年)

(本学教授)